經濟論叢

第八十七巻　第一號

農民層分解の分析方法……堀　江　英　一　1

ブルック・ファーム……穂　積　文　雄　27

シャフツベリの道徳哲学(一)……平　井　俊　彦　52

自由民権運動と府県会 (1) ……内　藤　正　中　74

イギリス定期船業の発達と海運政策(一)……山　田　浩　之　97

社会主義経済学の方法にかんする一考察……上　島　　武　112

昭和三十六年一月

京都大學經濟學會

第八十七巻　五二　第一号　五一

シャフツベリの道徳哲学(一)

平井俊彦

一　シャフツベリの思想的系譜[1]

十八世紀のイギリス啓蒙思想 Enlightenment は、ロックとならんでシャフツベリから始まった。ロックは十七世紀末の思想家であったとすれば、シャフツベリはほぼ一六九九年から一七一三年に活躍した人であり、いわば十七世紀から十八世紀への転換点に立っていた。というよりはむしろ、ウィレーのいうように「シャフツベリは啓蒙時代のイギリスの典型的なモラリスト typical English moralist of the Enlightenment であり、モラル・センス・スクール（道徳感学派）の創始者であった[2]」という点で、イギリス啓蒙思想、ひいてはイギリス社会科学の形成に画期的意義をもつとともに、ひろくフランスやドイツの近代思想に重大な影響をあたえたのである。[3]

われわれはまずはじめに、このように十八世紀の啓蒙思想に大きい意義をもつシャフツベリについて、その思想的系譜をたどろう。そして、そのなかでのちに展開するシャフツベリの思想のエレメントを問題点として提起しておこう。シャフツベリは人間性 human nature そのもののうちに生来、道徳感 moral sense をみとめた。人間の本性はけっして単なる感覚 sense のみにもとづいて、利己的な欲求のみに動かされるものではなく、むしろ社会

的な存在として友情や同胞愛といった感情、つまり社会感情 social affection がそなわっている。この社会感情こそ人間の自然にふさわしいもの、いわば自然感情 natural affection である。このように、シャフツベリは人間性そのもののうちに生来、他人との共存の感情、つまり道徳感のやどっていることをみとめ、人間性そのものの善 goodness を弁護したという意味で、どこまでも「人間の友」[4] friend of man であった。

ところでこの人間の道徳的能力の確立には、近代ブルジョワ思想史のうえで重要な問題性がひめられている。すなわち、十七世紀の二つの大きな思想であるピューリタニズムの超自然的な啓示 supernatural revelation にたいする批判と、ホッブスの感覚論的な利己的人間像の批判をとおして、シャフツベリは、ルネッサンスの人間像――さかのぼっては古代的な人間像――を十八世紀のブルジョワ啓蒙思想の地平で再生させたのであった。まず第一に、ピューリタニズムについていえば、それはピューリタン革命で王党派やそれに結びついていたアングリカニズムのアンシャン・レジームに抗して、イギリス初期ブルジョワジーの胎内に宿り、歴史を変革する推進力となったのだけれども、その思想には未だ古い教義 dogma がまとわりついていた。ことにカルヴィニズムでは、人間の自然は、原罪 original sin におちいっているものとして悪であり、徹底的にペシミズム的な人間観が支配していた。だからこそ、人間は罪の悔い改めのために、禁欲をおこない、こうしてのみ神によって救済される。この人間性の自己否定がかえって、ブルジョワジーのエートスとなり、資本主義精神として高く評価されたのだけれども、ピューリタニズムには強い人間不信がまとわりついていた。さらにホッブスの自然状態の人間像についてみても、人間性の根底には感覚的欲求によって自己の生存権を追求する個人があった。たしかにこの個人は封建性を打ちたおして出てくる近代人であったが、この個人主義的人間像には、そのままの形では相互に敵対するのみであって、新しく社会を

構成する情熱や感情はみられなかった。だからこそ、ホッブスがブルジョワ社会を構成するためには、自然状態の人間性を否定し、人間的自然の外側からこれを規定しなければならなかったのである。[5]

このような人間の罪悪観または原罪観や、超自然的救済の考え方は、十八世紀の啓蒙的人間像ことにシャフツベリのそれとまるでちがっていた。自然的人間の善を確信し、その理性の躍動を承認しようとする動きは、すでにルネッサンスにみられたのである。[6] 神に到達するためには、頭上で星の輝く天によるだけでなく、内なる人間の共通観念 common notions である理性や感情によるのである。人間には本来こうした善性 goodness が宿っており、これを実現さえすれば、おおわれざる神の真理にいたると考えられたのである。十七世紀においても、ルネッサンスの人文主義の思潮につらなるケンブリッジ・プラトニストたち[7] Cambridge Platonists は、ピュリタニズムが超越的な啓示から人間を審判したことに反対して、内在的な人間共通の理性から信仰を説明しようとした。ここに、啓示と理性との分裂を克服して、その一致を表現しようとする自然宗教 natural religion の基礎があたえられたわけである。シャフツベリは人間性の善を信じ、これを発現することがつまり神への信仰であり、人間の道徳こそかえって真の宗教である、[8] というのである。そのかぎり、既成宗教と道徳との関係は顚倒し、ブルジョワジーの道徳性は古い宗教からはなれて自律化したといいうるのである。こうして、トレルチのいうように、倫理をドグマ的権威や超自然的救済説から解放して、「倫理の自律性」Autonomie des Sittlichen を基調としたイギリス啓蒙主義の道徳哲学 moral philosophy が完成されたのである。[9]

ところで、こうしたシャフツベリの啓蒙的道徳感または自然感情 natural affection には、実はこれをその底で支えていたものがある。もともと、シャフツベリにはストア哲学やプラトンやルネッサンス期の思想家たちの世界

観と人間観が宿っていた。これを簡単にいえば、つぎのようになるだろう。宇宙にはすべてに生命をあたえる魂がやどっており、自然は無限の本質をそなえている。それは一つの秩序であり、秩序ある一つの有機的体系である。この大宇宙 macrocosm の調和ある体系は、同時にその一部である小宇宙 microcosm つまり人間の内的構造にもあらわれている。[10] 逆にいえば、人間のうちに調和へと志向する根本的な生命感情 Lebensgefühl があり、これが外の世界の調和を構成し、自然を秩序づけている。つまり、内的生命の充実によって自然は人格化されるのである。こうして「最善なるものは、シャフツベリにとっては、つねに自己の周囲との一致を感じる唯一の魂と、自己の魂が調和的に形成される方向から生ずる。……調和のある人格性 Persönlichkeit にまで自己を形成する内部の力のなかで、またこの調和を自己の内部で感じとることのうちに、シャフツベリは生きていた。諸力の均整、さらにたえず再生される人格性内部の一致、これが『地球の子の最高の幸福』であるなら、こうした精神は節度 Mass と均整 Proportion によって宇宙のどこにでもこうした傾向を感じとるにちがいない。[11]」シャフツベリの道徳感の根底には、実は宇宙の体系 system of cosmos の秩序が、さらにこれが人間の人格内部に投影された調和がひめられていた。というよりもむしろ、人間の主体の調和ある生命力が、外的自然のうちに、自己の人格性の調和あるリズムをききとったとでもいえよう。こうした宇宙観がその道徳感のうらがわをささえていたのである。したがってよくいわれるように、シャフツベリの道徳哲学をば単に唯物論に対立する唯心論であるとか、利己心に対する利他心の思想とのみ理解するは、表面的な見方だといわねばなるまい。

こうした考え方は、トレルチによれば「調和的有機体観」[12] Harmonie des Weltorganimus であろう。自然的に人間の人格のうちにこうした調和的秩序があり、これが道徳的善であるならば、これは同時に美 beauty である。

人間は生来、調和を求め、善を志向する能力をもつものだとすれば、同時に審美的力または美的構成力をもつであろう。シャフツベリに個性的なことは、実はこうした調和的人格のうちで美的感情 aesthetic feeling と道徳的感情 ethical feeling とが結びついていたという点であろう。テイラーは、こうしたシャフツベリの審美的構成力または直観的感情 intuitive feeling を、ニュートンとケンブリッジ・プラトニストであったヘンリ・モア Henry More に求めている。「ニュートンの自然的宇宙の体系は、物理的法則や過程の美しくすばらしい調和的秩序 harmonious order の啓示」であって、そこに全自然の「企画者」である神の賞讃すべき技がよみとられたのだが、さらにこの調和を、実はモアは人間生活や人間感情にも求めているとみられるのである。ヘンリー・モアはこれを「直観的な審美的・倫理的感情」と呼び、これを人間の自然感情として強調した。「こうした感情は、あらゆる美術の目的としてあらゆる現実的・客観的価値の領域や理念的調和の可能性を認識しようとする、人間に潜在せる自然的知識の源泉であり、またその価値の領域や調和の可能性にひたる喜びの泉」でもあった。[13] しかもこれらのうちでもっとも崇高なものが、ほかならぬ「善なる生活を生きる美術 art」なのである。そして、このような現実的・可能的な調和のある形態を識別し愛好する人間性に内在する能力は、「美的構成力 boniform faculty」にほかならない。とすれば、シャフツベリの道徳感もこうした美的能力として人間性に内在しており、人類に共通の内的能力として人間生活や社会生活のうちに調和を愛する生命力であったといえよう。

ここで、われわれはシャフツベリの思想的系譜をジョン・ロックとの関係においてのべる必要があろう。というのは、イギリス啓蒙思想はロックの体系をまって確立したといいうるし、したがって十八世紀に開花する思想は、なんらかの形ですべてロックから出ているからである。[14] ことにシャフツベリは、次節であきらかにするように、ロッ

クの死ぬ一七〇四年まで個人的にロックと親交があった。というよりは、初代の祖父シャフツベリ卿に仕えたロックは、シャフツベリの生れたときの侍医であり、幼時の家庭教師でもあり、また一七〇四年の死まで思想上や政治上で、さらに健康上でのよき相談相手であった。こうした私的関係からみても、ロックをぬきにしてシャフツベリをのべるわけにはいかない。事実、シャフツベリの思想は、すでにのべたところから推察できるように、ロックから大きい影響をうけていたとともに、ある面ではロックを徹底的に拒否した。ということは、逆にロックには、イギリスの近代思想の多面的な性格が矛盾したままで同居していたのであって、かえってこのことがロックを十八世紀の出発点として特徴づけているのである。[15] いささか図式的になるきらいがあるが、いとわずにあえていえば、ロックには一方でホッブスに基づいた感覚論的人間像と他方でケムブリッジ・プラトニストに似た反省力という内的感覚 internal sense があり、二つの要素が並立してロック特有の経験主義 Empirism をかたちづくっているとともに、また、近代自然法思想の基盤をなしていた。だからこそ、ロックはホッブスのような自然状態の非理性的人間を設定することはまぬがれたし、またケムブリッジ・プラトニストのようにある意味では旧い社会体制への妥協におちいらず、新しい市民社会の形成への思想上の武器をあたえたのであった。[16] いうまでもなく、ロックが生得的観念を、道徳に関する先験的知識をも拒否するかぎり、シャフツベリの先験的な道徳感とはあいいれるものではなかった。[17] しかも、ロックがホッブスの感覚論や個人主義的社会観をうけいれたかぎりで、シャフツベリの人間の自然的な社会感情とはちがった性格をもつであろう。だが、ロックにはこうした要素とはちがった理性や反省力があるのであって、これはシャフツベリの美的直観力または道徳感とつながるものをもっていたといえよう。[18] だからこそ、またロックが社会的自由や社会的人格を人間の本性にみとめ、これがブルジョワ社会の形成の原動力となりえたとおなじように、

シャフツベリの啓蒙思想がイギリスの社会科学の思想的基盤となったのではあるまいか。

以上でわたしはシャフツベリの思想的系譜をたどり、それが啓蒙思想ことにイギリスのそれとの関係にふれ、最後にロックの思想との連続面と非連続面をみてきた。ところで、このような思想的な系譜をもつシャフツベリの道徳哲学は、一体どのような性格または構成をもつものであろうか。すでに、わたしはその思想的系流をたどりながら、シャフツベリの重大な思想上の諸要素にふれておいた。いま、このような要素がどのような形で組みあわさっているかが問題となろう。このばあい、シャフツベリは論理的・体系的に思想を構築した思想家ではなくて、直観力がきわめて鋭く、随所に断片的に思想を吐露しただけに、この思想をうちがわから再構成し、立体的にその構造をしめす必要があるだろう。そしてこのことによって、さきにのべたシャフツベリの啓蒙時代の道徳哲学の創始者としての積極的意義を確認したい。とともに、シャフツベリがホッブスやピュリタニズムを批判して独自の道徳感を確定したそのことが、また同時に、マンデヴィルなどによって攻撃をうけたのであるが、こうしたシャフツベリの限界をしめそう。こうしてはじめて、十八世紀のイギリス啓蒙思想のなかでのシャフツベリの類型または地位があきらかになるであろう。と同時に、マンデヴィルをもふくめて、イギリスの啓蒙思想全体の問題性も、ある面でしめしうるであろう。

(1)　本稿は次のような構成をとる。

一　シャフツベリの思想的系譜　　二　シャフツベリの生涯

三　有機体的調和観　　四　道徳感の構造

五　批判的展望

(2)　Willey, B.: The Eighteenth Century Background, Studies on the Idea of Nature in the Thought of the Period,

1957, London, p. 58. シャフツベリの思想は十八世紀の前半にヨーロッパ全体の啓蒙思想に大きい影響をあたえた。イギリスではイングランドよりむしろスコットランドでうけいれられて、スコットランド学派の創始者となったことは、あまりにも知られた事実であろう。さらにフランスではモンテスキューは、シャフツベリをプラトン、モンテーニュ、マールブランシュとならんで四大詩人の一人と呼んだし、ドイツではヘルダー Herder が「十八世紀の最高の頭脳に大きい影響をおよぼした人」と評価している。

(3) わが国でのシャフツベリの研究は、きわめて貧しい。社会思想史上または経済思想史上で、シャフツベリが語られるばあい、ほとんどスミスの道徳哲学の系譜としてのみ問題にされているという現状である。しかも、このときでも、スミスの直接の先生であり、先任者であったハチソン Francis Hutcheson (1694—1746) の思想が主にとりあげられて、シャフツベリが語られるばあい、ハチソンを介してのみふれられているにすぎない。このようにみられた、シャフツベリ理解は、いわばスミス像の投影にすぎず、シャフツベリ研究としては一面的でしかない。シャフツベリはスミスに影響をおよぼしたためにのみ、思想史的に意味があるのではない。むしろ、シャフツベリがすぐれたイギリスの啓蒙的モラリストであったればこそ、スミス思想のうちに吸収されたと考えられる。この小論は、したがってスミスからシャフツベリをみるのではなく、むしろシャフツベリを中心として、それが展開する思想の系譜をたどろうとおもう。

(4) ジェームズ・トムソン James Thomson はシャフツベリを「人間の友」the Friend of Man (1700–48) と呼んだ。「シャフツベリは伝統的な人間誹謗、ことに一方で宗教のそれ、他方でホッブスのそれにたいして、人間性を弁護することを自分の仕事としたという意味で、人間の友である」Willey, B.: ibid. p. 57. p. 67. こうした見方で、ピュリタニズム批判とホッブス批判から、シャフツベリを説明したのは、ウイレーである。

(5) ホッブスの人間性のうちに近代性または革命性を摘出したのは、水田洋「近代人の形成」である。だが、ホッブスの自然状態の人間像は当然のこととしてロックやシャフツベリと異っていた。

(6) Troeltsch, E.: Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie, Gesammelte Schriften, Bd. IV, Tübingen, 1925. S. 272, Renaissance und Reformation, (内田訳「ルネッサンスと宗教改革」三〇—一ページ)。いうまでもなく、近代思想史をば、ルネッサンスと宗教改革との類型に分けて論じたのは、トレルチであろう。トレルチはキリスト教的禁欲主義

と対立させてルネッサンスをつぎのようにのべている。「ルネッサンスとは、もろもろの禁欲的思想とそれがもつすべての意義から精神を内面的に徐々に解放したことである。権力、所有、そして富、感覚と美、思想と芸術とは、人間存在の高き自由な目標として、大きな前提諸条件として、新しい光のなかにあらわれる。此岸、そのもろもろの課題と力、そのもろもろの謎と美しさは、この禁欲にたいしては、これをゆるめる力として作用し、そうしてついにはごく当然のことがらとなるのである。原罪と救済、彼岸と恩寵の助け、これらのものはあるいは後退し、あるいは消滅変化して、ついには単なる補助的存在か副次的思想にすぎないものと化し、もしくは人知を超絶した万有生命に内在するところの合成分といった性質のものと化する。そのことによって、教会のもろもろの権威や拘束は、すくなくとも内面的にも実質的にも、解体され、個人の自由、力、自力の感情はふたたび極度に高められた、ということはあまりに当然なことである」。

(7) ケムブリッジ・プラトニスト Cambridge Platonist とは、十七世紀後半に活躍した思想家で、ケムブリッジ大学におけるアングリカニズムの牧師であり教師であった。かれらはピュリタニズムの人間性の不信に反対して、プラトニズムの立場で人間性の愛と善意を信じていた。このケムブリッジ・プラトニストをシャフツベリの先駆者として高く評価したのは、ウィレーである。「十七世紀のモラリストのうちで、人間の自然的道徳を高揚しようとしたのは、ケムブリッジ・プラトニストであった。」Willey, B.: ibid. p. 58. ただこのばあい、ウィレーはケムブリッジ・プラトニズムの啓蒙の一面性のみをとりあげて、それがかえってアングリカニズム的立場での反動性とつならるものである点をみず、また、シャフツベリの道徳感との基本的差異をみおとしているのは、致命的である。われわれはあとで、シャフツベリの道徳哲学がケムブリッジ・プラトニストとはちがって、単にルネッサンスへの復古ではなかったことをはっきりさせるであろう。

(8) Shaftesbury, A. A. C.; Characteristics of Man, Manners, Opinions, Times, Vol. II, 1711, Treatise IV. An Inquiry concerning Virtue, or Merit. p. 5–7. シャフツベリはこの論文の冒頭で研究の動機をかかげ、宗教と道徳との関係をはっきり人間性、または道徳的原理から追求しようとしている。

(9) Troeltsch, E.; ibid. Die englischen Moralisten des 17. und 18. Jahrhunderts, S. S. 375. トレルチは近代社会を担う歴史的主体たる人間の内部構造または人間の行為を重要視するから、当然のこととして近代人の倫理が啓蒙思想の内部で果す役割をきわめて高く評価した。ことに、十七、八世紀のイギリス・モラリストの役割は、トレルチにとって大きく、近代倫理

学とそれに照応する宗教学の母胎となった。「イギリスのモラリストの仕事の本質は、まず第一に、自然的、内的要請から倫理学を説明し導出することによって、キリスト教倫理から究極的・実践的に作りだされた倫理の自律性の概念をば学問的にとらえ、これをすべての倫理的判断のうえに移そうとしたこと。第二に、倫理をば、従来の独断的な権威主義的学問や超自然的・二元論的救済説や恩寵説から導き出す従来のやり方にかえて、内在的・心理学的分析の方法 die Methode einer immanent-psychologischen Analyse を研究の基礎としたことである。」S. 376.

(10) Troeltsch, E.; ibid. S. 373（内田訳、三三ページ）。トレルチによれば、シャフツベリのこうした宇宙観や人間観は、ルネッサンスの哲学の発展であった。ルネッサンスの「楽天的・審美的全宇宙観は、のちにはシャフツベリやヘルダーにあっては宇宙の定式にまでなった。……進歩・発展の思想、つまり小宇宙のなかに神性が集約的に反映しているという思想は、これによってさらに拡大されて、精神の生成、生長のなかにも神性の集約的反映がみとめられるようになった。……大宇宙も小宇宙も新しい光のなかにあらわれ、そして小宇宙のとらわれざる自己理解からあらゆる認識が生じ、小宇宙のくもりなき自己表現からあらゆる芸術はおこる、という思想である。」

(11) Dilthey, W.: Weltanschauung und Analyse des Menschen seit Renaissance und Reformation; Gesammelte Schriften, Band II; Aus der Zeit der Spinozastudien, S. 399. 人間性の深みにまで立ちおりて、そこに無限の生命の可能性をよみとり、これが人間性なる小宇宙から外的世界の大宇宙にまで拡大し、全宇宙に調和を構成する。ここにディルタイはシャフツベリの汎神論的一元論 Pantheistischer Monismus があると主張する。そして、こうした調和的宇宙観がシャフツベリ哲学の本質であるとして、ゲーテ、スピノザからシャフツベリを特色づけている。

(12) Troeltsch, E.; ibid: Die englischen Moralisten des 17. und 18. Jahrhunderts. S. 420–1. 「内と外へ調和を促進するこうした倫理学はすべて、自然がすべてたがいに関係しあい、均衡する世界有機の調和を前提とする。」そしてトレルチは、この思想的系譜をつぎのようにみている。「シャフツベリのうちで有効に働き近代現世人の形態をとっているのは、古代およびルネッサンスの審美的精神である。シャフツベリが倫理を規定しているのをみると、キリスト教的同化から解放されたキケロの honestum の規定が再現されている。その一般的な背景はキケロのように、有神論的に修正されたストアの世界有機体論である。」

(13) Taylor, O. H.: A History of Economic Thought; Social Ideas and Economic Theories from Quesnay to Keynes, 1960, New York. p. 30-5. ティラーのシャフツベリ像は、きわめて、ウィレーにちかく、ケムブリッジ・プラトニスト、ことにヘンリ・モアとの親近性を大きくとりあげている。「シャフツベリの心理学と倫理学のなかでの中心的カテゴリーである道徳感は、ヘンリ・モアの展開したものであった。」ただこのばあいも、ウィレーのばあいとおなじく、シャフツベリとモアとの同一性のみが強調されて、その区別があきらかでない。

(14) Willey, B.: Seventeenth Century Background, 深瀬基寛訳「十七世紀の思想的風土」三二八ページ。「ニュートンの世界像とロックの人間精神像とは、十八世紀ヨーロッパの教育され啓蒙された人士ならば、だれでもが普通にもっている知識となるにいたった。とりわけロックは、ほとんど聖書的な権威をもって十八世紀のすみずみまで影響をおよぼしている著者と評されてきた。というのは『人間悟性論』の最近のある編者がいっているように、『ロック以後のヨーロッパ哲学の発展は、主として彼の用語のあいまいさをあきらかにし、彼のたてた前提によって、おのずから生じた難問を克服しようとする一連の努力からなっている』のだから。にもかかわらず、このロック以後の発展の方向を決定したのは、ロックその人にほかならなかった。したがって、デカルトにならって彼を近代哲学の始祖と称してもさしつかえはなかろう。」

(15) ロックとシャフツベリとの関係の問題は重要である。これは近代自然法思想をどう考えるかということや、近代自然法思想とスコットランドの道徳哲学との関係をどうみるかという問題にかかわってくる。いまこの問題を詳しく論じる余裕はない。ただわたしは、ある意味でシャフツベリ研究をとおして、かえってロック思想のエレメントをつかみ出せるのではないかと確信している。

(16) Troeltsch, E.: Die englischen Moralisten des 17. und 18. Jahrhunderts. S. 421. シャフツベリの道徳哲学を近代ブルジョワ社会の地平で評価したのはトレルチであろう。「この倫理の理念の地平は、近代国家であり、近代社会である」。

(17) Bonar, J.: Moral Sense, London, 1930. p. 19-20. ロックが生得的観念を批判して、知性の近代的革命をおこなったことは、あまりにも有名である。これがすでに一六六〇年の『自然法論』でおこなわれたことは、別の機会に指摘した(「若きロックの自然法思想」(一)(二)、経済論叢八五巻一・二号)。このようなロックの生得性観念の批判が、シャフツベリのモラル・センスの先験性とちがっていたという議論は、大方の承認するところであって、ことにボナはこの点を両者の決定的な区別とみ

ている。ボナは「モラル・センスはロックの原理と一致するか」と問い、ロックの直観的知識 intuitive knowledge ですら道徳的法則を自明としてみとめえないものであるから、「ロックの定義と制限は、モラル・センスの承認と全く矛盾する」。さらに、ボナは、ロックの理性はシャフツベリのモラル・センスとちがっており、認識論がシャフツベリにないとして両者を区別する。だが、認識論があるかいなかという標識が、どれほどの意義をもつかは、疑問であろう。

(18) Taylor, H. T.: ibid. p. 31. ボナとちがって、シャフツベリの道徳感をロックから導出したのは、ティラーである。「シャフツベリの主要な源泉の一つは、ロックの哲学である。すぐに他の部分的な源泉があげられるであろうけれども、その源泉は一部、ロックの人間精神における『内感 internal sense、または反省力 power of reflexion』、の考え方であって、シャフツベリは、かれ独自の道徳感に発展させたのである」。この点の認識は重要である。

二　シャフツベリの生涯[1]

シャフツベリの思想をのべるまえに、かれの生涯について簡単にふれておこう。というのは、一般に思想というものは、その思想家の環境や教育または経験ときわめて密接なかかわりをもっているから、生涯をのべることはその思想をよりよく理解する前提となるだろう。ことにわが国ではあまり知られていないシャフツベリであるだけに、このことはぜひ必要だと考えられる。このばあい、ことに前節の思想的系譜からして、ルネッサンス文化や、ロックおよび自然神学の代表者たちとの交渉を中心にながめてみよう。[2]

シャフツベリ家はイギリスの名門である。代々政治家であったようだが、初代シャフツベリ Anthony Ashley Cooper Shaftesbury[3](一六二一―八三年)が七二年に伯爵をさずけられてから、その子孫はそれぞれ何代シャフツベリ伯と名のった。イギリス史上有名なのは、この初代シャフツベリ First Earl of Shaftesbury と、第三代 Third

Earl と、第七代 Seventh Earl である。初代は名誉革命前にホイッグ党をひきいて[4]、カトリック教徒である王弟ヨーク公（のちのジェームズ二世）の擁立派に対立し、さらにモンマス公事件に参画したイギリス政治家の人立物であったし、第七代（一八〇一―八五年）は、トーリー党に属したが進歩的な社会改革者で、一八三三年の工場法、四二年の炭坑夫保護法、四七年の十時間労働法など労働者階級のための立法に貢献した人物[5]であった。

啓蒙思想史上、有名であり、小論の研究の対象となる思想家は、第三代シャフツベリ伯 Third Earl of Shaftesbury である。かれは祖父の住居であったロンドンのエグゼター・ハウスで一七七一年二月二六日に生まれた。父はいうまでもなく第二代シャフツベリ伯であり、母はルトランド伯 Earl of Rutland の娘ドロシー・マナーズ Lady Dorothy Manners であった。ところで、われわれに興味ぶかいことは、ジョン・ロックとシャフツベリとの関係である。ロックは一六六六年に初代シャフツベリの知遇をえて、以後同家に主治医として、あるいは友人として、さらに家庭教師としてつかえた[6]。ロックはこの初代シャフツベリ伯との交渉によって、政治に関する知識をうることができたのみならず、ロックの思想的発展の画期である『宗教自由論』の成立には、初代シャフツベリ伯の考え方が大きい影響をあたえた、といわれる[7]。ロックもまた、かれでシャフツベリ家の知遇にこたえて、同家に大いに尽力した。父シャフツベリは身体が弱いうえに知力も足らず、そのために祖父はロックにその家庭教師を依頼するとともに、一六六九年には配偶者の選定をまかせ、同年の父母の結婚はロックの仲介でおこなわれたのである。その後、ロックはシャフツベリの母につかえ、一七七一年にシャフツベリが生れたとき、侍医として立ちあった。祖父と父はもちろん、シャフツベリも生れたときから、ロックの世話になったわけである。幼時、父が片輪であったので、祖父がシャフツベリの保護をしていたが、その教育もロックに委託された。ロックはこの幼児を『教育論』の原理にした

がって教育したといわれる。[9] 一六七四年にロックはエリザベス Elisabeth という女性家庭教師にシャフツベリのためにギリシャ語とラテン語の教育を依頼したが、これら古典語に巧みなエリザベスはシャフツベリといっしょに住んできわめて上手に教えこんだ。ロックもみずから、七七年の渡仏中にラテン語のテキストを探したり、たびたびシャフツベリを訪ねていた。このように、幼時からすでにシャフツベリがロックの啓蒙思想の洗礼をうけていたし、またギリシャやローマの思想に接したことはきわめて重大である。もっとも、具体的にどのような書物に親しみ、また、どのような学問を好んだか、を詳細に伝える資料は、残念ながら見あたらない。だが、この古典語の学習とロックの『教育論』の適用が、幼時にすでにシャフツベリの思想の素地をつくるうえに、大きい力をもっていたことは推定できよう。

だが、一六八二年に祖父がオランダで客死してから、両親はシャフツベリをロックの管理からはずして、ウインチェスターの学校へ移した。三年間かれは同地で勉強したが、祖父のとったホイッグの立場やモンマス公事件にまきこまれて外国へ逃亡した祖父の政治上の運命がたたって、学友から冷たくとりあつかわれた。その地で苦しんでいたシャフツベリは、八六年一一月に生涯の親友クロプレー John Cropley やベーコン Thomas Sclater Bacon とともに第一回目の外国旅行に出発し、イタリアをはじめドイツやフランスを見聞する機会をもった。この間の具体的な成果は詳かではないが、ことにイタリアでの美術への関心はきわめて大きいものであったことから、[10] 帰国後の研究の素材があたえられるとともに、そのルネッサンス文化に親しんだことが大いにシャフツベリの思想の骨組を形づくったことであろう。

名誉革命後の八九年にシャフツベリは帰国して、しばらく研究をつづけていたが、九五年五月二一日、ウイリア

ムの第二議会にプール選出の議員となり、秋の解散ののち九五年一一月四日に再び同地から選出された。いうまでもなく、シャフツベリの政治的立場は祖父のそれをうけてホイッグの立場であって、国民の自由や議会の独立のために大いに闘った。いまこの政治人としてのシャフツベリの面目をよく伝えてくれるエピソードがある。この時代まで、イギリスでは反逆者の裁判において、被告に弁護士をみとめなかったが、これを改める法案が下院に提出され、シャフツベリがこの賛成演説をすることとなった。かれは演説の途中で混乱して倒れた。議会はかれを励まして演説をつづけさせようとしたが、シャフツベリはつぎのようにのべて大いに感銘をあたえたのである。「諸君、わたしはいま提案中の法案について自分の見解をのべるために立っている。このわたしがひどく混乱して自分の提案していることをのべることができない。とすれば、なんの援助もなく、また生命を奪われると考えながら自分を弁護しなければならない人は、どういう条件におかれていることだろうか」[11]。これだけしゃべったとき、議会は感動し、法案は通過した。このエピソードのなかに、われわれはシャフツベリがウィットに富み、しかも国民の権利のためにいかにたたかったかがよみとれるとともに、その反面、かれがいかに政治人として不適であったかがわかるであろう。事実、ホイッグ党が優勢であるときにもあまり関心をしめさず、健康を損ったこともあって九八年の解散後に政界から身をひいたのであった。もっとも、翌年父の死後、第三代シャフツベリ Lord Anthony Ashley Cooper となって再び政界に入り、その間はホイッグ党のためにベストをつくした。が、やがて一七〇二年アン女王即位を機会に私的生活に入り、政治的名声や野心よりも、平静な研究と少数の友人との交遊をえらんだのであった[12]。

シャフツベリはなによりもすぐれて文化人であった。しかも、ヨーロッパ世界に生きた啓蒙の人であった。九

八年に政界を退くとただちにオランダへ旅立ち、この国で一年間、ロックもいたクエーカー徒の商人ファーリー Benjamin Furly の家に滞在して、ベール Pierre Bayle(一六四七―一七〇六年)やルクレルク Le Clerc(一六五七―一七三六年)の知己をえたといわれる。これらのひとびとはいずれも宗教的自由主義の立場をとり、啓示宗教にたいして理性に基づく自然宗教を主張した点で、シャフツベリに大きな影響をあたえたとおもわれる。[13] かれの処女作で主論文『徳または価値にかんする研究』が書かれたのはまさにこの時期であり、翌九九年に友人トーランドの手で著者の許可なしに出版されたのである。その後、一六九九年から一七〇二年までの再度の政治活動をはさんで、一七〇三年から四年にかけて再びオランダにわたった。マコーリはこのシャフツベリの外遊を「精神上の奢侈な生活」intellectual luxury と呼んだが、よほどシャフツベリにはこうした生活が適合していたようである。この間、ロックとの関係はいぜんとしてつづいていた。一六九一年にロックが休息を求めてオーツに居を移してからも、シャフツベリはたびたびロックを訪問した。ロックはルクレルクやニュートンあるいはサマーズ卿とも交遊していたようで、九二年にはこれらの人びとともにシャフツベリに『寛容に関する第三書簡』を送っていた。一七〇三年の外遊も「おそらくロックの忠言にもとずいて」おこなわれたものであった。[14]

しかし、この外遊もかれの健康をいやすことができなかった。一年間のオランダ生活ののち、ぜんそくのため止むを得ず帰国した。帰国後もロンドンの霧には耐えられず、ベンチワースにあるクロプレーの家に住んだり、一七〇六年にはハンプステッドに移った。一七〇九年八月、友人ロバート・モールズワースのすすめもあって、やむをえずハードフォードシャーのリー Thomas Ewer of Lee の娘ジェイン Jane と結婚した。この結婚の目的は、かれの家柄を維持し、かれの身のまわりの世話を考えていた友人を満足させることであって、かれ自身はけっして積極

的なものではなかったもののようである。他方、この間にシャフツベリの思想上の仕事がおこなわれた。一六九八年に出版されたケムブリッジ・プラトニストであるウィッチコート Dr. Whichcote の説教集 Sermons への序文と、トーランドの出版した先の処女作を別とすれば、かれ自身一七〇八年までなにも出版しなかった。一七〇八年にはじめて匿名で『熱狂にかんする書簡』A Letter concerning Enthusiasm が公にされ、一七〇九年五月に『センス・コムニス――ウイットとユーモアの自由にかんするエッセイ』Sensus Communis, An Essay on the Freedom of Wit and Humour が、ついで第二の大作である『モラリスト――哲学的熱狂詩』The Moralists, a Philosophical Rhapsody があらわれ、これらがすべてまとめられて一七二二年に三巻本全集『人間・生活様式・意見・時代の諸特性』の初版が出版された。

この全集の出た一七一一年に健康は急速に衰えたため、夫人をともなって温暖の地ナポリに出発し、その地で平和な余生を送った。古代文化やルネッサンス文化の香りたかいイタリアでの生活が、愛情深い妻の看護とともに、シャフツベリにはこの上ない幸福をもたらしたことはいうまでもないが、一七一三年二月一五日についにこの精神上の故国で客死した。

(1) シャフツベリの生涯を知るうえでもっとも貴重な文献は、かれの息子第四代シャフツベリ The Fourth Earl of Shaftesbury の『シャフツベリ伝』を主とした『伝記・書簡集』Rand, B.: The Life (by his son), unpublished Letters and philosophical Regimen of Shaftesbury, 1900. である。わたしはこの文献をみることができなかった。したがってここでは、Dictionary of National Biography, Vol. 4. に収められている「シャフツベリ」(執筆者はレスリー・スティーヴン Leslie Stephen) と、ジェイムズ・ボナの『モラル・センス』に、主に依っている。

(2) 日本でやや詳しくシャフツベリの生涯をのべたものとしては、上田辰之助氏の『蜂の寓話――自由主義経済の根底にあるも

の」があるだけである。

(3) Osmund Airy の「初代シャフツベリ伝」によると、共和制時代にはクロムウエルに反対して、王政復古に尽力、ために一六七二年四月二三日に伯爵を授けられた。National Biography, Vol. 4. p. 1045.

(4) Maurois, André: Histoire de l'Angleterre, 1937. Paris. 水野・小林共訳『英国史』新潮文庫下、四七六—七ページ。「王政復古時代の政党形成について、モロワの興味ぶかい文章を引用しよう。「王政復古この方、この国を通じて政党の萌芽が形成されつつあった。それは内乱の激情から生まれたものである。イギリス人は国事に興味をもつ習癖ができていた。……一方の側は、かっての王党のように、王の味方であった。反対側は、この手合をトーリすなわちアイルランドの海賊と名づけて、かれらが実は偽装の旧教徒であることをほのめかした。ところがかれらは、この名前を鼻高々とひけらかして、その後この名を自称するにいたった。トーリの側では、王の敵方にホイッグという名をあたえた。ホイッグというのは、ホイッグモアWinigamores（スコットランド西部の清教派の農民の一団）の略称なのである。ホイッグは叛逆者であった。悪魔こそが第一番目のホイッグであり、シャフツベリが二番目であった。だが、その叛逆たるや、どこまでも貴族的なものであった。トーリは地主と国教会とに結びついていたし、ホイッグは非国教徒とロンドンの商人とに結びついていた。一六七九年、一七年ぶりで王が選挙人を召集したとき、これら新生の諸党派は、集会、示威行列、激越な演説などの手段にうったえた……。」

(5) エンゲルスが「イギリスの十時間労働法案」のなかで、労働者が自分たちの不幸に関心をよせてくれる貴族、博愛主義者とよんでいるのは、この第七代シャフツベリである。「マルクス・エンゲルス選集」第六巻上四八ページ以下。

(6) Aaron, R. I.: John Locke, Oxford, 1955. p. 15. 「ロックはシャフツベリを賞讃した。アシュレーはまたかれで、この若い男の学識をみとめた。一六六七年の中ば以後ロックは、アシュレーの忠言者の一人となり、ロンドンについてかれとともに生活した。」われわれの第三代シャフツベリも、ロックとシャフツベリ家との関係にふれており、ロックをシャフツベリ家に推薦したのは、ベネット Bennet であるとのべている。Amsterdam: Remonstrants' MSS. J. 20. (Cranston, M.: John Locke. p. 95)。

(7) 七二年にアシュレーがシャフツベリ伯となってから、ロックも政界に入り、牧師任免局の役人になり、翌七三年には通商植民局書記に任ぜられて、「一六八八年の革命後も利用しえた多くの知識をえた」。Aaron: ibid. p. 17. もとより、この間年

俸をそれぞれ三百ポンド、五百ポンドあたえられたことをつけ加えねばならない。

(8) Cranston, M.: John Locke, p. 111. 「アシュレーはロックが寛容論の代表者となるまえに、すでにそうだったのであった。このことはなにもロックが寛容論についての成熟した見解をアシュレーから受けとった、ということではない。というのは、ロックはアシュレーに会うころに、ほぼアシュレーと同じ考え方をしていたからである。だが、ロックに寛容論に体系的な注意をむけさせ、ロックの自由主義的思想を発展させたのは、アシュレーであった。」一六六七年に、ロックは『宗教自由論』を書いて、これがのちの『寛容に関する書簡』の基礎となったといわれるが、この思想の画期が、一六六七年であり、シャフツベリが大いに関係していたのである。

(9) ロックの『教育論』Some Thoughts concerning Education, 1693. は、ロックの友人エドワード・クラーク Edward Clarke の子供のエドワードやエリザベスの教育法に関してクラークにあてた書簡であり、ほぼ一六八四年ごろからまとめられたものと推定されている。だが、その構想の基礎は、初代シャフツベリに子と孫の家庭教師を依頼された時期にすえられたとみられる。ことに、ロックは第三代シャフツベリの教育には力を入れ、独自の方法によって教育したことが、ロックの死後シャフツベリがのべている言葉からあきらかである。「私たちの教育については、ロック氏はあとで出版されましたが、あの通りのかれ独特の原理をもちいられました。それは成功であって、私だけはあとで病気をしたので弱くなりましたが、他の兄弟はみな丈夫で立派に大きくなりました。私は長男でしたから、特別に祖父とロック氏とにじかに教育をうけましたが、ロック氏は私の教育については絶対の権限をもっていました。私の今日あるのは、実際の両親についてはロック氏のおかげで、氏には最大の感謝を捧げねばなりません」。（押村襄訳『教育に関する考察』の解説参照）

(10) シャフツベリは初めての外国旅行に出たのは、十五歳のときであるが、このルネッサンス文化の伝統の地イタリアで美学を学んだことは、シャフツベリの思想を育てるに大なるものがあったとともに、またこの時の好印象から晩年の安住の地としてイタリアを選んだとおもわれる。Willey, B.: Eighteenth Century Background, 1957. p. 57.

(11) Bonar, J.: Moral Sense, 1930. p. 23. このエピソードは相当に有名らしい。この演説の言葉は引用者によってそれぞれちがっているが、レスリー・スティーヴンの「シャフツベリ伝」にも、上田辰之助氏の『蜂の寓話』（二一一ページ）にものべられている。

(12) シャフツベリの生涯で政治生活がどのような地位をしめていたか、また、その関心のありようはどうであったかという点については、研究者の間で二つの対立がある。スティーヴンは一七〇一年三月に分割協定が議会で問題となったとき、シャフツベリがサマーズ卿の招請で急きょ病をおして下院に登院したことや、選挙に大きい功績をあげたことなどから、シャフツベリのイギリス政治への情熱の大きかったことをあげている（National Biography, Vol. IV. p. 1056）。また『ノリタニカ』でも、最終的に政治と訣別したあとでも、「なお政治に鋭い関心をよせていた」（Britanica, Vol. 20. p. 428）とされている。これに反して、ボナは「ホイッグ的原理が勝利をおさめているときでも、政治をこのまなかった」（Moral Sense, p. 23）とのべており、クランストンも「祖父のような政治的素質をもちあわせていなかった」（John Locke, p. 472.）と指摘している。いずれにせよ、主観的に情熱をもっていたとしても、健康が政治の激務に耐えられなかったことには異論がなく、また、生涯の力点がその知的生活にあったことは、あきらかであろう。

(13) シャフツベリの宗教的立場がどのようにして形成されたかは、きわめて興味ぶかい。処女作『徳または価値にかんする研究』が公になる一年前に、シャフツベリはケムブリッジ・プラトニストの代表者ウィッチコート Benjamin Whichcote (1609–83) の『説教集』Select Sermons に序文をつけて、その広教主義的立場をうけいれ、これを擁護した。そのことから、広くケムブリッジ・プラトニストとのつながりが指摘されている。スティーヴンは「おそらくケムブリッジ・プラトニストことにウィッチコートとカドワース Ralph Cudworth (1617–88) に大きな影響をうけたようである。また、カンバーランド Richard Cumberland (1631–1718) とも多くの点で一致している」（N. B. Vol. IV. p. 1057）といい、ウィレーも「シャフツベリが自分の精神上の先駆者とみとめたウィッチコート」（Willey, ibid. p. 61）をあげている。

ところが、これに対してきわめて興味ぶかい反対論がある。それはクランストンのもので、シャフツベリは一六九八年にはすでに理性神学の立場に立っており、これがソウシニアン Socinian のそれであったといっている。Cranston, ibid. p. 473. いうまでもなく Socinianism は、原罪を否定して理性宗教を主張したイタリアの神学者ソキヌス Faustus Socinus (1530–1604) にはじまる宗派であることから、シャフツベリの第一回のイタリア旅行でえたものと推定できよう。

(14) Cranston; John Locke, p. 472.

さらに、一七〇〇年に入ってからも、ピーター・キングやシャフツベリがイースターにいるロックを訪問しているようで、ロ

ックはこのときには政治上の有益な助言をシャフツベリにあたえたようである。Aaron, ibid. p. 42. Cranston, ibid. p. 452. このようにみると、ロックとその教え子であるシャフツベリとの関係は、ロックの死ぬ一七〇四年まで、政治上・思想上・健康上すべての生活にわたってつづいていたと考えられる。ことに、思想上の交渉を考えるうえで、ロックがシャフツベリにあたえた影響はきわめて大きかった。このことは、ロックがピュリタニズムを批判して、広教主義をとったという点に端的にあらわれており、シャフツベリも同一の線にそっていたのである。この点で、クランストンがロックおよびシャフツベリとケムブリッジ・プラトニストとの関係を重視し、さらにコリーがロックとオランダのアルミニズムとの関係を強調していることは、きわめて重要である。Colie, R. I.: Light and Enlightenment, A Study of the Cambridge Platonists and the Dutch Arminism, 1957.

もとより、シャフツベリがロックに重要な影響をうけたからといって、同一の思想的基盤に立っていたことを意味するのではない。むしろ、シャフツベリはロック批判から出発したともいえるのであり、自らもはっきり、ロックとの思想上のちがいをのべていたのである。ボナは、一七〇九年一一月一七日付けのスタンホープ Stanhope あての手紙を引用してこのことを証明している。Bonar; ibid. p. 23-4.

シャフツベリの論文は、第一論文から第八論文までつぎのように配列されている。番号はシャフツベリの附した論文番号であり、かっこはその論文のふくまれている全集巻数をしめす。

1 A Letter concerning Enthusiasm, to My Lord [Somers], 1708 (Vol. I)
2 Sensus Communis: An Essay on the Freedom of Wit and Humour, 1709 (Vol. I)
3 Soliloquy: or Advice to an Author, 1710 (Vol. I)
4 An Inquiry concerning Virtue, or Merit. 1699 (Vol. II)
5 The Moralists, A philosophical Rhapsody, Being A Recital of certain Conversations on natural and

moral Subjects. Jan. 1709 (Vol. II)

6 Miscellaneous Reflections, 1711 (Vol. III)

7 A Notion of the Historical Draught or Tablature of the Judgment of Hercules, 1713.

8 A Letter concerning Design, 1714.

（未　完）